

3章. 輪島市の歴史文化の特徴

3-1 輪島市の歴史文化の考え方と特徴の整理

(1) 歴史文化の考え方

本市の歴史文化は、歴史文化遺産の特徴を整理すると3つの要素が積み重なって形成されていることがわかる。第一にその基盤となるのは、能登半島外浦に吹きつける「あいの風」によってもたらされた「環境」である。夏季には北前船の往来を助ける日本海沖合から陸へ吹く穏やかな北東の風であるが、冬季には降水量や雷が多く湿った北西の季節風として吹きつける。この厳しくも豊かな気候が長い年月を経て美しい地形(海岸線)や天然記念物を生み出している。また、河川沿いからは様々な遺跡や古墳、須恵器や石棒が出土していることから、人々は古代から河川流域を中心に生活していることがうかがえ、海と山と川と風、全ての自然が生み出す「環境」が輪島の歴史文化の基盤となっていることがわかる。

第二にその「環境」を基盤とした歴史文化の上にあるのが「暮らし」である。自然と共生した農林漁業を中心とする生業、間垣や農家住宅など生業によって発展した住文化や、海・山・川の恵みに感謝する心から生まれた「あえのこと」「キリコ祭り」などの祭礼・風習など「暮らし」から形成された歴史文化がある。

さらに第三に、「暮らし」によって形成された歴史文化の上に他地域との「交流」がもたらした歴史文化がある。養老2年(718)に越前国から分立して成立した能登国、荘園の成立、武家勢力や社寺勢力などによる他地域との交流、時国家に代表される豪農の経済活動、日本海沿岸の往来による港や地域の繁栄など、親の湊を拠点とし主に海運による他地域との「交流」がもたらした歴史文化である。

本市はこの「環境」「暮らし」「交流」の個性的な3つの要素が積み重なって輪島独特の歴史文化が形成されていると考えられる。

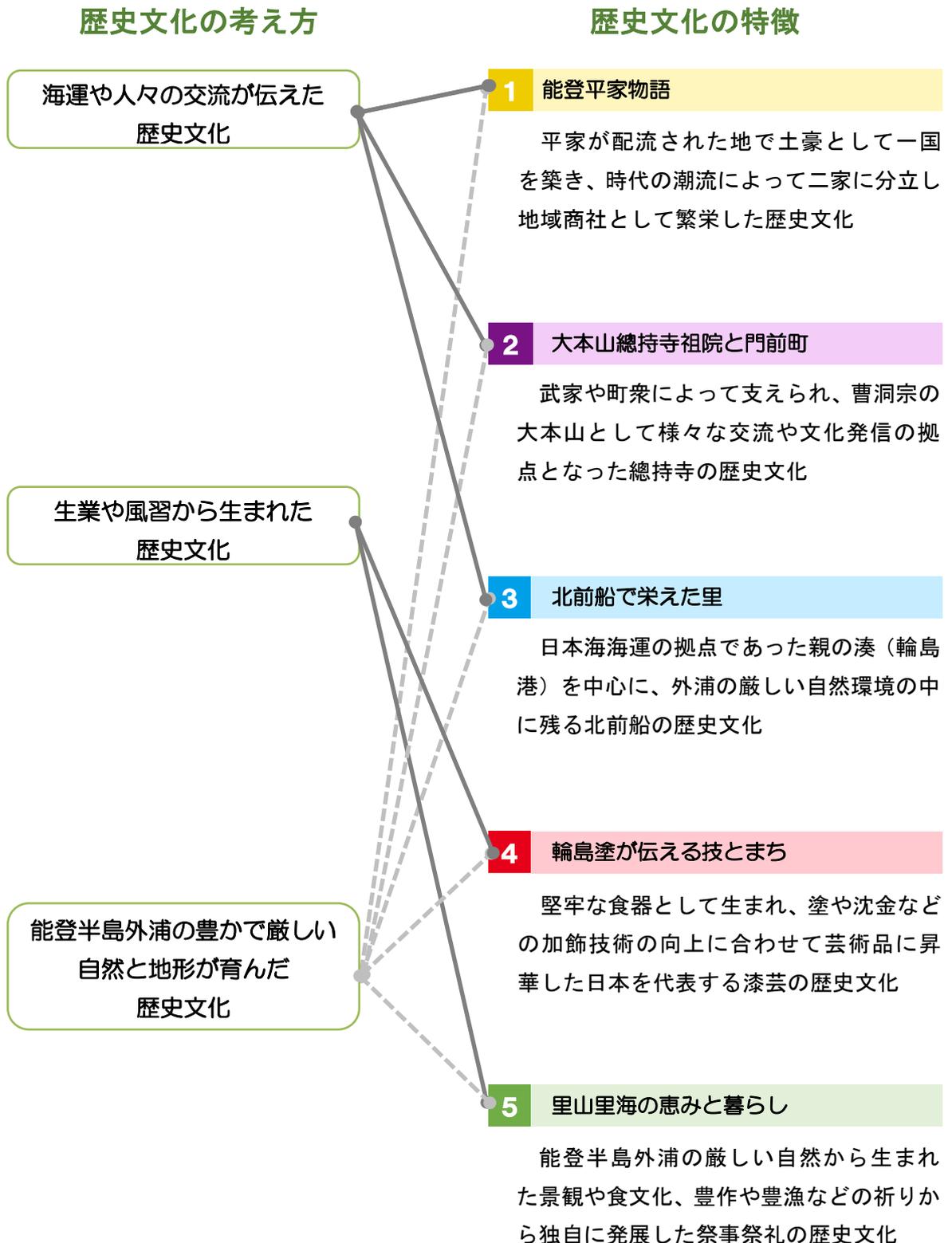


歴史文化の考え方	主な歴史文化遺産
海運や人々の交流が伝えた歴史文化	中段の板碑、天堂城、姫ヶ城、上時国家住宅、時国家住宅、北前船、總持寺祖院、能登のまだら
生業や風習から生まれた歴史文化	白米の千枚田、大沢上大沢の間垣集落、アテ林業、輪島塗、輪島朝市、製塩、海女漁、農家住宅、塗師屋住宅、あえのこと、アマメハギ、キリコ祭り、そんべら祭り、御陣乗太鼓
能登半島外浦の豊かで厳しい自然と地形が育んだ歴史文化	曾々木海岸、鳴き砂、桶滝、男女滝、古和秀水、桜滝、アテ天然林、三井新保遺跡、宅田上野山遺跡、横穴古墳群、石棒、須恵器

図 3-1 歴史文化の考え方と主な歴史文化遺産

(3) 歴史文化の考え方と歴史文化の特徴の関係

歴史文化の考え方と歴史文化の特徴の関係は下図の通りであり、「能登半島外浦の豊かで厳しい自然と地形が育んだ歴史文化」は、輪島の歴史文化の基礎となる考え方であり、5つの歴史文化の特徴全てに関わるものである。



3-2 輪島市の歴史文化の特徴

5つの歴史文化の特徴の概要は以下の通りである。

(1) 能登平家物語

平清盛の義弟平時忠が能登に配流され、その子時国がこの地を開拓し、中世的名主経営を行い、26軒の下人を擁する程となり、室町末期には製塩と交易で開けた曾々木の3か村を合わせて、近世に入り時国村と成した。天正9年(1581)に能登は加賀前田藩領に、慶長11年(1606)には時国村の一部が越中土方領となり、時国家は二重支配を受けることとなった。

土方領の時国家(上時国家)は肝煎・十村を務め、幕府直轄領となった後には大庄屋を務めた。前田領の時国家(時国家)は山廻役、御塩懸相見役、御塩方吟味人役など藩の役職を代々受け継いだ。両家は船を所有し廻船業も行っていった。今もなお両家の茅葺きの大規模な主屋や庭園といった文化財がのこり能登に配流された平家の末裔にまつわる歴史文化が色濃く残る。

(2) 大本山總持寺祖院と門前町

總持寺は櫛比^{くしひのしょう}庄^{しょう}最古の寺院であったとされる諸岳^{しよがく}觀音堂^{じようけん}の定賢^{じやうけん}權律師がその觀音堂や寺領・敷地を瑩山^{えいざん}紹瑾^{じょうきん}禪師に寄進し、禪院に改めたことに始まり、入寺後の瑩山は「諸岳山十條之龜鏡」を定めて寺制を整え、正中元年(1324)峨山^{がざん}韶碩^{じやうせき}に總持寺住寺職を譲った。

峨山は二十五哲と称される多くの俊才を育成し全国に拠点^{きょてん}を築き、住職を一定期間で交代させる「輪住制」を確立した。全国から輪番住職を任された僧侶たちが本山を往復するために北前船が利用された。

總持寺は、明治44年(1911)の鶴見移転まで曹洞宗の大本山としての地位を確立し、時の権力者の庇護下にあり、様々な交流や文化発信の拠点であった。

(3) 北前船で栄えた里

輪島市は日本海に大きく突き出す地理的条件のため、古くから日本海の交通の要所として経済や文化交流の拠点であった。親の湊と称された輪島港をはじめ、赤神、剣地、黒島、鹿磯、五十洲、皆月、大沢、鵜入、光浦、谷内、南志見、時国と外浦の厳しい地形や自然環境の海岸沿いの集落には、船絵馬や入船帳などの文化財や、黒島の重要伝統的建造物群保存地区の町並み、北前船船主の住宅として、旧角海家や南惣家、時国家、上時国家などの建造物なども残っている。

(4) 輪島塗が伝える技とまち

輪島塗の歴史は古く、平安時代の漆盤が漆工用具と共に出土し、室町時代の出土品に地の粉を使用した輪島塗の製法を備えた線刻椀がある。

室町時代に小規模な産地が形成され、17世紀後半に工法が確立した輪島塗が全国に名声を博するのは、18世紀後半である。大きく発展した要因は、地の粉の使用を始め、自作自売の旅を通じて、全国の優れた文化情報を持ち帰り塗師文化を育み、その塗師文化を背景に優品を製造したことと、天明年間に大黒講(組合)を組織し、徹底した品質管理を協定することで輪島塗の信頼を高めたこと、そして生産の分業化によって生産性と技術を向上させたことなどが挙げられる。昭和52年(1977)に輪島塗が国指定重要無形文化財に、昭和57年(1982)には製作用具など3,804点が国指定重要有形民俗文化財に指定された。

(5) 里山里海の恵みと暮らし

半農半漁の西保海岸付近の集落には、冬季の強い季節風をさえぎるため、集落の周囲に「間垣」と呼ばれる防風垣根を巡らせた文化的景観があり、内陸の山間地には、傾斜のあるクズヤ葺きの屋根とカヤの雪囲いからなる集落風景がみられる。

海岸に向けて棚田が広がる「白米の千枚田」は、海食崖が随所に展開し、急峻な傾斜面が広がる地すべり地帯であり、米の生産の場であるとともに、地すべりなどの災害を防止する機能も果たす独特の景観を形成しており、輪島の里山の歴史文化は農林業から生まれたものが多くみられる。

海女漁の技術は、『万葉集』や『今昔物語集』等にその存在が散見され、永禄年間に筑前鐘ヶ崎から渡ってきた海女が技術を確立し、加賀藩による庇護を長く受け、今日まで受け継がれてきた。

朝市は平安時代末期にはすでに開かれていたとされ、「朝市通り」と呼ばれる約360mの通りに約200店ほどの露店が立ち並ぶ。海女漁や朝市を中心に、輪島の里海の歴史文化は漁業や製塩業などから生まれたものが多くみられる。

また、輪島の里山里海においては、自然と神仏と生活が混然一体となった、原風景の濃縮地であり、あえのこと、もっそう祭りなどの農業に関するもの、山祭りなどの林業に関するもの、起舟やアマメハギ、面様年頭、御陣乗太鼓などの漁業や海に関するものなど、多様で多彩な行事が数多く現代に伝承されており、季節のサイクル、農林漁業の節日にあわせて今もなお生活に密着して営まれている。